

# あそ 10

2022



寄稿

亀田虎童子

百までは五年ほどなる春月夜  
筋書のなきが遊びや寒雀  
コロナ禍や祭の寄付の来ずなりぬ  
生涯に梅干いくつつ喰うたやら  
俺様と言はんばかりや蟾蜍

俳句年鑑（角川二〇二三年版）

十月集

佐藤 竹僊

さがすかに

うぐひすや足湯の甲のひらひらら

舗装路に脱ぎちらかして竹の皮

竹叢の出口をさがすかに揚羽

テレビから妻の持唄缶ビール

灼野原雀無口で移り行く

ヒマワリの耐熱温度以上かも

八月の眩しきものにはだへかな

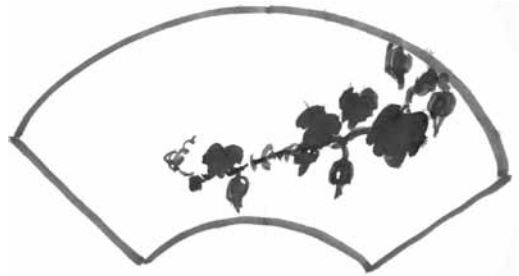
目ぐすりのひやりともせず夜のつまる

運ばれてひよいと厠を蚊帳吊草

その中に靡かぬものも秋の草

雑草も秋草といふなびきやう

ゆうづつや鹿は水飲む水に入り



獣の頃

篠田大佳

加害者の八月六日躁がしく  
みんなんや空は曇りて餓鬼の街  
夕焼や獣の頃のかくれんぼ  
バイバイの後に広がる闇を蟲  
廃駅の森の木霊や秋の風



8月尽

須賀敏子

夏逝くや「平和のための戦争展」  
二十品目食べて八月十五日  
低くとも頂上はいいね秋近し  
あの人も耳遠くなる登山帽  
朝顔の自由奔放取り敢えず  
桃が来た皮つきのまま食べてみる  
片陰や久方振りの歯科医院  
侵略は止む兆しなく八月尽



雑詠

都築繁子

爽やかやたまさか都電の新車輛  
南瓜煮て美味しと思う敗戦日  
原爆忌飛ぶを夢みる千羽鶴  
貸出しの電動自転車雲晩夏  
小物とて窯出しうれし萩の花  
晩夏光漣の立つ観光船

揚羽蝶

長崎桂子

眩む晴ゆるりゆうゆう黒揚羽  
揚羽来る庭の好物聞きたくて  
朝蟬や今日を励めと急き立てる  
昼食後の氷菓午後の家事助く  
氷片を含み脳には厨ごと  
大水や災害列島の八月  
百合咲くやうつとうし日日やや癒す  
汗ながる甘味を含み麦茶のむ



蜥蜴

森なほ子

枯るること忘れていたり蘭の花

足元に犬も寝てをり籐寝椅子

夏満月空に線引く椰子の幹

恐竜の兎して指程の蜥蜴

鉢もたげたるに気付かぬ蜥蜴の子

そと触れてパニックになる守宮の子

飛び石の繋ぐ離れや秋の草

朝方の雨音はもう秋の雨

八月六日

赤座典子

秋天や樹海を分かつスバルライン

五合目の冷気に五感覺醒す

秋の蜂背もこもこと花つたふ

稔り田に四基の墓石まとまりて

秋澄めり七つ並んで千切れ雲

芋莖食む薄紅の酢に咽せながら

虫の夜名を教はりつ上る坂

幼子はセピア色のまま広島忌



太陽そして影

秋川 泉

炎天や自転車をぬき走る子ら  
草いきれ息止め走るまん中を  
主義主張少し異なりまづ麦茶  
待ち焦がれジンジャエールの新生姜  
鉄骨を垂直に立て晩夏光  
瓦割る男の拳夏の果  
玄米の朝飯に添へて初茄子  
野分あと猫ゆうゆうと遠ざかる

夏から秋

七郎衛門吉保

富士五合釣鐘草と下界見る  
誰が描くや黒一色の夏の富士  
この猛暑樹海に捨てて殺めたし  
道の駅看板顔の金糸瓜  
西瓜にもブランドの有りそんな顔  
秋の雲一句とともに消えにけり  
浮き雲に遊び備へる帰燕かな  
秋嶺を分かつ浮き雲白い帯



新涼

篠田純子

新涼や濁音の無き万葉集

生身魂かつてバレーのアタッカー

「土食つて虫食つて渋ーい」銀座に燕鳴く

新涼や嚙下体操スクワット

法師蟬日比谷の水場錆にけり

新涼や顎と鎖骨と接触す



## 八月号作品より

篠田純子・篠田大佳・佐藤喜孝

夕立あと紫蘇の香のせし母の胸

亀田虎童子

『題詠しりいず』として一題で五十句作りワープロ袋綴の簡易な製本で仲間と楽しんだ。その内の『香』よりの五句。一九八八年発刊。原本は引越した際紛れてしまった。参加者は内田真人・大平節弥・木村嘉男・栗田庄・佐藤喜孝・高田きみえ・高島茂・竹内弘子、そして亀田虎童子。名前を打ち込むだになつかしい。

夕立のあとの洗はれた大気の匂。そして紫蘇の香のする母の胸元。幾とせも前の匂と共にさまざまなことが蘇ってくる一句。題詠とは思へぬ完成度である。私にもあるかと思ひ返したがにほひに關する記憶は無いやうだ。(喜孝)

香の記憶は、男性の方のほうが敏感なのかも知れません。雷を恐れ、お母様に抱かれていらつしやつたのでしょうか。雨が上がり、空気が変わります。お母様から離れても、確か紫蘇の香りがしていた、お母様の胸を見つめます。夕立の度、雨が降り止むと紫蘇の香りを思い出されるのです。(純子)

たはむれに香水の霧軍服に

亀田虎童子



軍人の生活は伝聞でしか知らないのですが、これが制服になると、たちまち理解が進みます。色気のない生活を日々過ごしていて、たまたま手に入った香水を気まぐれに吹きかけます。おしゃれとも背伸びとも気晴らしとも取れる香水のにおい、それも青年には不釣り合いなおいを想像させるのです。(大佳)

てふてふよりちひさき鳥が青榎の實

佐藤竹僊

佐藤先生は、三宝寺池吟行の折、榎のそばのベンチに長くお座りになつていらつしやいました。「小さい鳥が、榎の青い実を啄ばんでいたので、取つて口にしてみたが苦かつたよ」とおつしやつたのを、思い出しました。「翡翠が、ほら彼処」とか、「鷺が居るよ」とか、ベンチから水平に、公園を見下ろしていらつしやるようでした。(純子)

虫より小さな鳥となると、自然界では相当苦勞していると思われれます。戦後の食卓できようだいがおかずの取り合いをしているように、小鳥がライバルに餌を取られないように、慌ててまだ熟していない榎の実を口にして様子が見えます。(大佳)

武蔵野の茂りに茶店汁粉喰ふ

七郎衛門吉保

「武蔵野の茂り」が土地の雰囲気をよく想像させます。枯色で鬱蒼とした風情の道を進むと、そこには茶店があり、眼前に現れた生活感に妙に安心して、小腹が空いたという景を想像します。茶店で食べるお汁粉は野暮ったくて温度以上に温かい感じがします。(大佳)

この暑さ争点にせよ参院選

七郎衛門吉保

しょうがない事だが酷暑に怒りをぶつけてゐる。この庶民感覚を捉げれば地球温暖化といふ地球規模の話までになる。命令形といひ「参院選」といふ生々しい詩語になりにくい語彙が意外な働きをしている一句である

作者は現世に生きてゐる証としての作句に心がけてをられるやうだ。時事句は難しいと知りながらの励みやうは頭が下がる。この句はさういふ日ごろの研鑽から生まれた力強いメッセージ作品に仕上がつてゐる。(喜孝)

「一列らんぱん破裂して」紫陽花の鞠をつとつく

篠田純子

前句は、日露戦争の時に流行つたわらべうたであるようです。軍人さんの勇ましい様子を歌にしたものようですが、詳しいことはインターネットには残っていません。耳に残る日常に戦争があった頃の風景と、優しく花を愛でている様子の対比が、戦争に傷ついた人を喚起させます。(大佳)

ストーカーのけはひ定家葛の花の午後

篠田純子

ストーカーは日本語に訳せないさうだ。ストーカー行為は江戸の時代でもあつたと思ふが、コト

バとして遺つてゐないといふ。で「ストーカー」は日本語ださうだ。ストーカーといふ言葉に昔は  
だうだったのかと思ひを馳せたのは、「定家葛の花の午後」による。詳しくはないが定家と式子内  
親王のお話は能にもなつてゐる。藤原定家の執心が葛となつて式子内親王の墓にからみつくお話と  
か。定家は立派なストーカーかもしれないが、当時の人はストーカーとしてではなく受け止められ  
てゐたのだらう。(喜孝)

道ならぬ定家の恋や片鶉

成瀬櫻桃子

廃ビルの割れたる土の姫女苑

篠田大佳

住まいの近所は商業地で、最近ビルの建替えが盛んです。掲句のビルは小さい規模の、転売物件  
のイメージです。ほつたらかされ、コンクリートの割れ目に土が見えています。姫女苑の逞しい生  
命力に、廃ビル跡地の再生を感じます。(純子)

梅雨晴間キスする鳩に羞恥心

篠田大佳

梅雨の晴れ間の公園での一景。「鳩に羞恥心」は、鳩さんが羞恥心を抱いてゐるといふことでは  
ない。鳩を見てゐる人の心持。繊細な心の揺れを捉へた作品。(喜孝)

夏帽子知らない町の郵便局

須賀敏子

少し涼しげな白い夏帽子に、夏の日差しが反射します。初めて訪れた町をしばらく歩いてみると、  
鬱蒼としたところに郵便局が建っています。ランドマークを見つけてほつとしたやら、目的地にま  
だ辿り着いていないことの不安があったりしながら、涼むでもなく、郵便局を通過します。また、  
夏の光が帽子に差し込んで少し暑くなってきました。目的地までもう少し。そんな光景を想像しま  
した。(大佳)

郵政民営化と云ふのは何だったのだらうか。ウィキペディアにはアメリカからの要請と書かれて  
ゐたがどうだらうか。アメリカの顔は大きいから本当のやうにもみえるが。しかし民営化以前と同  
じく全国に郵便局があり、郵便事業以外にもゆうちょ銀行の二刀流で親しまれてゐる。鉄道の無人  
駅が郵便局になつてゐるところもあるのを知った。「夏帽子」は季が動くとか他の季語でもといふ  
意見は必ずあるとおもふが、作者は気にすることはない。この句はこの位のわがままは許してほし  
い。(喜孝)

失なひし物は数へず額の花

都築繁子

歳を重ねると、失うものが増えてきます。悲しい事ばかりです。それ等を数え立てても何にもな  
らない事と、作者の前向きな姿勢を感じました。額の花の取合わせが、しみじみとします。(純子)  
無くなつてしまったものに悔いがあったのかもしれない。あるいは、ふと数えようとリストアッ

プしたら、多すぎてやめてしまったのかもしれない。額の花の花卉の数も数えるの嫌だな、好きな人が数えてみてよと読めて、取り合わせに共感します。忘れることは何も悪いことばかりではなく、人間には必要なもののような気がします。忘れることで前に進める時もあるはずです。(大佳)

ひまはりやテニスのラリー響きをり

都築繁子

作者はどうか知らないが私には夏の午後の気怠さが伝はってくる。避暑地の手入れが完璧でないテニスコート。途切れてはまた続くテニスボールを打つ音が眠気を誘ふ。ひまはりと打球音がそんな光景をもたらしてくれる。(喜孝)

麦の秋豊作に笑む三重の人

長崎桂子

麦の豊作に喜ぶ三重の人たちを画面いっぱい想像します。鑑賞のために調べたところ、三重県は令和三年の作付面積が日本第四位で、麦の生産が盛んであるようです。消費地からの想像では及ばないほど大量の麦が獲れたでしょう。幸せのお裾分けをいただいたような読感です。(大佳)

はや葦簀用意に疲れカミモール

長崎桂子

桂子さんから見慣れぬ言葉から世の中の動きをいつも教へてもらってゐる。カミモールはキク科の花で和名は加蜜列カミツレのこと。字にするとイメージが全く違ふ植物のやう。ハーブの一種とか。他

にも手塩にかけてハーブを育ててをられる様子。心地よい疲れなのであらう。(喜孝)

魚狙ふ翡翠ねらふカメラマン

森なほ子

カメラを構えることは、狩りに似ているように思います。対象に向かってレンズを向けて、ファインダーを開く。カメラは命を獲りませんが、弓や銃に負けじと、対象を狙います。カメラマンの野性を思い出させる一句です。(大佳)

通勤の群れに混ざりて夏帽子

森なほ子

この句の夏帽子は働いてゐる。夏帽子とその人が生き生きと通勤の人の中をゆくさまが面白い。鏝広帽か麦稗帽、目立ったことだらう。(喜孝)

青鷺の花魁道中ひとやすみ

赤座典子

花魁道中のように、列を成して道を進んでいる様子でしょうか。そうなると、雛鳥が可愛らしく歩いているような光景を想像します。中心の「花魁」は、妖艶に歩いているのかもしれない。疲れたのでひと休みする様子を思い浮かべて、可愛らしい様子がうかがえます。(大佳)

水の中での青鷺のあゆみを時代劇などで見る花魁道中の花魁のしづしづと大げさに一歩一歩す

む特徴のある足さばきを思ひ出した。典子さんは見立て俳句に特異なひらめきがある。ところがこの句は今までの比喻作品から一步進めた。「ひとやすみ」は見立てだけに終ってゐない句に仕上がってゐる。長い研鑽のたまものである。(喜孝)

幼さの残る翡翠降下せず 秋川 泉

見た目は大人に見えても、まだ幼い翡翠を作者は発見します。その降下をためらう姿は、人間でいうバンジージャンプのような成人の儀式を想像させます。(大佳)

歳時記に書き込みのあり沙羅の花 秋川 泉

沙羅の花はインド原産とか。「沙羅双樹の花の色」と古典につながるゆかしき花の名。この花に托して遺品である歳時記を心して繙くのである。

沙羅の花は二種類あつて俳句では面倒な花だ。ひとつは夏椿ともいひ白い清楚な椿。もうひとつはインド・ネパールに咲く。淡い黄色の花だとか。日本では小石川植物園と新宿御苑そして京都府立植物園にあるさうだ。(喜孝)

## 夏の食べ物

さくらんぼ 篠田大佳

今の会社に勤めてから、会社のお偉方に季節の食べ物贈られてきます。梅雨の季節になると、さくらんぼが届いて、お裾分けを貰います。素直に美味しいので俳句の題材にしたのですが、句材としては素直ではないです。

薄暗の給湯室のさくらんぼ 大佳

茗荷の子 森なほ子

夏らしいたべものなら「茗荷の子」がふさわしい。わずかな裏庭のスペースに、小さな茗荷畑を作ってもらった。もう5年になるが、毎夏の茗荷が楽しみだった。一畳半程のスペースに、計50個近い子が採れたので、結構リッチな気分になれたものだが、今年は五個だった。理由は簡単、植木屋の新人がふさふさ繁った葉を半分くらいに刈り込んでしまったのだ！彼の目には伸び過ぎの草にしか見えなかったのだろうか？

親方に言い付けたら、もっと腹の立つことには若い親方が、何だかんだ言い訳して、一言も謝罪の言葉が聞けなかったのだ。次回はもう頼みませんけど。

# 殊収集

誰も来ぬ何処へも行かぬ酷暑かな 亀田虎童子

\*\*\*

戦争と御出来おできを我慢する 佐藤 竹僊

あめんぼに同心円のついて行く 篠田 純子

鰻屋の柁の俎柁の下駄 篠田 大佳

AIによぎる死想や夏の夜 篠田 大佳

暗殺の昼に子鳥のよくしやべる 篠田 大佳

四回もワクチン打って日の盛り 須賀 敏子

新聞をじっくり読んで極暑の日 須賀 敏子

プランタのハーブを摘めり今朝の秋 都築 繁子



摂氏三七度朝から危険な七月 長崎 桂子

昼さがり畳を好む籠枕 長崎 桂子

冷房や王候のごと長椅子に 森 なほ子

松蟬に引き留められて長湯かな 赤座 典子

四回もワクチン打たる戻り梅雨 赤座 典子

片陰を行って帰って投票日 赤座 典子

エプロンのその一枚の暑さかな 赤座 典子

鬼灯や支度ととのふ新佛 秋川 泉

四方開け風道つくる夏の朝 七郎衛門吉保

喜孝抄



夏一番は、西瓜だ。

「夕方になつたらおいで」。近所のお兄さんの西瓜畑に行った。」畑の隅に小屋がひっそりとあった。夏の暗闇の中、筵に覆われた小屋には二人の男は黙って座っていた。私も並んで黙っていた。やがて畑に走る人影が……。『来たー』と、素早く兄さんと小父さんが飛び出した。西瓜泥棒も二人だった。捕まえたような逃げたような……。

「収穫間も無い沢山の西瓜を守るため、こうやって西瓜の番小屋で見張っているんだよ。」

泥棒は大人だったのか子供だったのか、暗闇の中、幼い私には見分けがつかなかった。泥棒を捕まえる為でなく、丹精込めて出荷間も無いたくさんのスイカを泥棒から、あそこには見張りがあるから……と近寄らせない『番小屋』なんだとわかった。

小さな村は、番人も泥棒も全て村人。村と云う共同体は、息苦しくもあり、温かくもあり濃密で、全てのことを村人は共有していた。

寺の施餓鬼に、檀家のその家で採れた一番素晴らしい西瓜を供物として御本尊に備えてくださった。それを井戸の中につるして冷やし家族だけでなく、いくつも檀家の大勢の人たちと賑やかに食した。あの時代の西瓜の味は特別に美味しかった。

# 夏の食べ物

夏の食べ物 篠田純子

普段から食が細いので、夏場は特に食欲の出るよう気にかけている。朝はごくだみ茶を飲み、リゾットを食べる。昼は魚、夜は冷奴が美味しい。梅干、あみの佃煮、煮卵、とろろ芋、焼き茄子……。毎日同じような物を食べている。自家製の梅酒を夕食時に少し飲むと、食欲が出るようだ。

## あをキーワード俳句辞典(やせーゆく)

### 行方

恋猫の恋の行方や不眠症	芝宮須磨子
石仏の頭の行方著莪の花	須賀 敏子
旅の行方釣舟草に連れ添ひて	堀内 一郎
爪染めし友らの行方鳳仙花	田中 藤穂
茶筥供養煙の行方花八ツ手	東 亜 未
旧友の行方は知れず蝮の道	堀内 一郎
荒る地の聖火の行方五月尽	森山のりこ
赤ん坊のでんでん虫の行方かな	篠田 純子
黄砂ふる国の行方を透かし見る	芝宮須磨子
手袋のときどき行方知れずなる	吉成美代子
遠目にも桜またたき吾が行方	堀内 一郎
へりの列行方はいづこ鳥渡る	早崎 泰江
台風の行方気にしつミシン踏む	須賀 敏子
来し方も行方も知れぬ春一番	木村茂登子
木の実落ち風の行方を確かめし	大日向幸江
プロペラの音の行方や枯木立	須賀 敏子
沸き起り行方いづこか雲二月	長崎 桂子
郵便配達行くさきさきの熟柿かな	定梶じょう
氷上の石の行く末臙にて	赤座 典子
行く末	
行く手	

### 猫車行く手陽炎ふ行きがたし

暑かりし行く手を染める大西日  
畦道の行く手を阻む梅雨の雷  
近道のゆくて行く手にしじみ蝶

### ゆくりなく

ゆくりなく鹿と目のあふ沢あやめ  
ゆくりなく下駄にはきかへ夕月夜  
ゆくりなき出合ひもありし初護摩会  
通夜の家満月ゆくりなく懸かり

### 湯気

朝の浜湯気もうもうと馬駈ける  
裸身より湯気もうもうと寒稽古  
巻織の湯気の向うのカンダハル  
流鏝馬や湯気たつ尻に冬の蠅  
大根煮る一人暮しの湯気立てて  
鯽大根湯気より眼玉弾きだす  
湯気立てて時計を止めてキルト刺す  
はしり甘藷うすむらさきの湯気の中  
汽笛凍て溝を来る湯気しまじ湯か  
冬の雨湯気ふくいくとまんぢゆう屋  
寒に入る立食ひ蕎麦の釜の湯気  
湯気上る鬼太郎茶屋の板葺に  
湯気立てて倒れまいとす紙コップ

定梶じょう	鈴木多枝子
芝宮須磨子	堀内 一郎
森山のりこ	芝宮須磨子
佐藤 恭子	定梶じょう
	鈴木多枝子
	堀内 一郎
	芝宮須磨子
	定梶じょう
	鈴木多枝子
	田中 藤穂
	須賀 敏子
	鎌倉喜久恵
	田中 藤穂
	後藤 志づ
	須賀 敏子
	竹内 弘子
	定梶じょう
	篠田 純子
	竹内 弘子
	定梶じょう
	竹内 弘子
	竹内 弘子

吐く息と馬体の湯気のもうもうと  
鉄瓶の湯気の向うに幼き日  
早朝の湯気と豆腐と春の雪  
雪解風川面に湯気の立つところ  
湯気が上る屋台の上に豚の顔  
フレームの鉄管湯気を洩らしけり  
炊立ての湯気香りたつ茸飯  
埋めたての歴青に湯気雲道  
箆かふせ湯気立ち上る玉蜀黍  
雪嶺に湯気たちのぼる飼葉桶  
幸せは鮫鱈鍋の湯気の中  
団子屋の蒸籠の湯気寒気団  
肉じゃがの湯気に揺られし顔と声  
**湯けむり**  
湯けむりやゆるゆる山を爐もみぢ  
湯煙の中に初雪訪れる  
湯の街の溝も湯けむり梅蕾む  
うたせ湯の湯けむり流れ星月夜  
湯煙りの別府の町や十二月  
湯ざましはひよわなる水初雀

鈴木多枝子  
須賀 敏子  
東 亜 未  
竹内 弘子  
吉成美代子  
吉成美代子  
齊藤 裕子  
篠田 純子  
齊藤 裕子  
佐藤 喜孝  
赤座 典子  
定梶じょう  
七郎衛門吉保  
石森 和子  
松村美智子  
田中 藤穂  
吉成美代子  
大日向幸江  
佐藤 喜孝  
関口 ゆき

湯沢駅稲架と案山子のお出迎へ  
雪の中静まり返る湯沢町  
近々と越後湯沢の黄葉山  
曾孫たち湯沢でスキーといふ電話  
**湯島**  
湯島の梅孫にもとめし鶯ふたつ  
絵馬動揺湯島天神受験時  
巻き舌の客引き湯島熱帯夜  
十葉の濡る湯島の切通し  
梅雨晴の湯島聖堂有座の器  
**豊か**  
人去つて情豊かなる鴨の池  
遠蛙水豊かなる過疎の島  
鳳仙花手押しポンプの水豊か  
醉芙蓉髪の豊かに老いにけり  
黒髪の豊かな巫女や新走  
初春や豊かに実るピラカンサ  
田の色豊かに変はる九月かな  
ヴィーナスの豊かな腹囲冬かもめ  
朝食の豊か春眠さそひけり  
故郷の山は豊かに茸狩  
豊かさは心の中に八つ手咲く  
豊かなる稲田に日暮ひたひたと

赤座 典子  
赤座 典子  
森 なほ子  
田中 藤穂  
堀内 一郎  
芝 尚子  
渡邊 友七  
森山のりこ  
芝 尚子  
篠田 純子  
芝 尚子  
芝宮須磨子  
須賀 敏子  
田中 藤穂  
鎌倉喜久恵  
須賀 敏子  
須賀 敏子  
赤座 典子

山水をパイプで引いて芹豊か  
平成のボロ市食のみ豊かなり  
**委ね**  
落椿早起流れに身を委ね  
**茹**  
喧嘩して治まらぬまま茹小豆  
茹汁の白くにごれる走り蕎麦  
お帰りなさい大鍋に茹でた蕎  
うどん茹で検診結果暮の秋  
土用風老婆との寧き日茹だり  
素麺を茹でて原爆の日の暮れる  
大根の筋目を見せて茹あがる  
茹でたまご素直に剥けず春の風邪  
海水の濃度に茹でし落花生  
茹で上げて芋名月の衣被  
葉を茹でし湯は金盥悴む手  
茹で玉子するりとむけり花の下  
復活祭菜を茹でし湯の金色に  
茹茹でて皮はぎながら句を捻る  
さつと茹で茹は剥かれてあさみどり  
茹で上り鉢にちんまり菠薐草  
パスタ茹で蠟燭灯し降誕祭  
茹で上げた枝豆に振る能登の塩

大日向幸江  
須賀 敏子  
栢森 定男  
河合 笑子  
竹内 弘子  
須賀 敏子  
安部 里子  
渡邊 友七  
須賀 敏子  
木村茂登子  
木村茂登子  
森 理和  
木村茂登子  
森 理和  
大日向幸江  
田中 藤穂  
齊藤 裕子  
齊藤 裕子  
長崎 桂子  
大日向幸江  
黒澤 佳子

茹卵十二月は雨ばかり  
茹卵つるりと剥けて春立てり  
藤穂女史の茹で菠薐草甘し旨し  
雪笹を緑濃く茹で緑雨かな  
冬菜青くひとりの日々のある日茹つ  
防風の嫩葉茹でをり海の音  
春筍茹づ甘く変れり厨の香  
小春日の固茹玉子立ててみる  
**湯殿**  
新涼の石鹼の香の湯殿かな  
水芭蕉も雪の中なり湯殿みち  
湯殿山はだし詣でや雪のこる  
残雪に桜も咲いて湯殿山  
老若の裸像が笑ふ泥湯殿  
花冷の湯殿へ急ぐ長廊下  
**ゆとり**  
脱ゆとり物は言ひやう椿落つ  
表情にゆとり戻りぬ鱗雲  
数へ日のゆとり持ちたき遊歩して  
**ユトリロ**  
薔薇園にユトリロ・ルノワールの名前  
**湯吞**  
湯吞ふたつ眼鏡のふたつ置炬燵

中川句寿夫  
森 なほ子  
篠田 純子  
七郎衛門吉保  
定梶じょう  
田中 藤穂  
赤座 典子  
大日向幸江  
芝 尚子  
堀内 一郎  
堀内 一郎  
齊藤 裕子  
齊藤 裕子  
木村茂登子  
赤座 典子  
赤座 典子  
長崎 桂子  
赤座 典子  
芝宮須磨子

## あとがき

### 寄稿欄

虎童子さん体調よろしからずと今号休詠。次号に鶴首。

新作は一句がよろし花苧荷 竹 僊

### 短文の題「青」

『あを』の誌名を決めた時はドタバタした。もともとは『青』だった。なぜ青にしたかはつきり思ひ出せない。迷って困って私の句集名から採ったと思ふ。気に入った口ゴまで完成、ところが友人が波多野爽波の俳誌が『青』だよと教へていただき危つくセーフ。爽波の「骰子の一の目赤し春の山」は有名で句集名にもされてゐる。私の『青寫眞』に「賽の目の一つは朱し秋の暮」がある。どこまでも縁があるやうだ。『骰子』は一九八六年発行。『青寫眞』は一九八一年発行。で私の句は消さないでもいいかな。

短文の題が抽象的で書きにくい人とさうでない人と別れるかもしれない。左記の句、参考になれば可。人の間あをき香りの鬼灯市 赤座 典子

数へ日の空の半分あををと	田中 藤穂
春の野にいろどりの佳き「あを」三とせ	芝 尚子
石菘黄なり海はあをなり岬鼻	鎌倉喜久恵
あをさぎの夜は念仏聞きにくる	篠田 純子
薫風をあをしと思ふぼんのくぼ	堀内 一郎
あを十年櫛の紅葉に迎へられ	須賀 敏子
青あをと草育ちおて昼の虫	長崎 桂子
あをくさくかたくつめたき螢なれ	竹内 弘子
青芝はでんぐりがへるためにある	佐藤 喜孝 (喜孝)

二〇二二年十月号

発行日 十月十日

発行所

〒177-0042

東京都練馬区下石神井一丁目六の三

サンハイツ石神井2 一階

電話 090 9828 4244

印刷・製本・レイアウト 竹僊房

カット／須賀忠男・福井美佐子・テイリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

ゆうちょ銀行(普) (店番018) 4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)